

## 農業新聞野良ばなし【 気温で変わる雨と雪 】14.11.14

11月22日は暦の「小雪(しょうせつ)」で、二十四節気の1つである。

天気図上では、西高東低の冬型気圧配置が次第に強まり、北日本や高い山などでは雪が降り始める季節をいう。

今年は初冬の訪れが早く、既に各地から記録的な初霜や初雪の便りが届いている。

関東など太平洋側の地方では、低気圧や前線で天気が悪くなってきた場合、地上付近の気温がポイントだ。概ね、7度以上なら雨、零度以下になると雪になる。

ハウス栽培や収穫などの農作業で気になる雨から雪に変わる温度は、1度～6度の間で、雪または雨になったりするため予想が難しい。

そこで、凡その目安として使われている数値が頼りとなる。

一般的に、地面付近の気温が、4度程度だと雨が雪に変わる確率は30%、2度になると雪になる確率が60%に増える。

一方、日本海側の目安は、北陸地方の輪島上空およそ5000mの気温が、マイナス30度になると雨が雪、さらに下がってマイナス35度以下になると大雪のシグナルといえる。

このような上空の気温を知る方法は、大別して3つあるが、長短がある。

テレビやラジオの天気予報の解説者が話す上空の気温の内容に耳を傾ける。ただし、そのことに触れない場合があり、不確実。

高層データ観測を行なっている札幌、稚内、根室、秋田、仙台、輪島、米子などの気象官署に電話で問い合わせる。

問合せの連絡時間に制約などがあり、実用的とはいえない。

気象会社と契約する。今は、安価な携帯電話のサービスがあり、便利である。

( 気象情報システム株式会社 高津敏 )